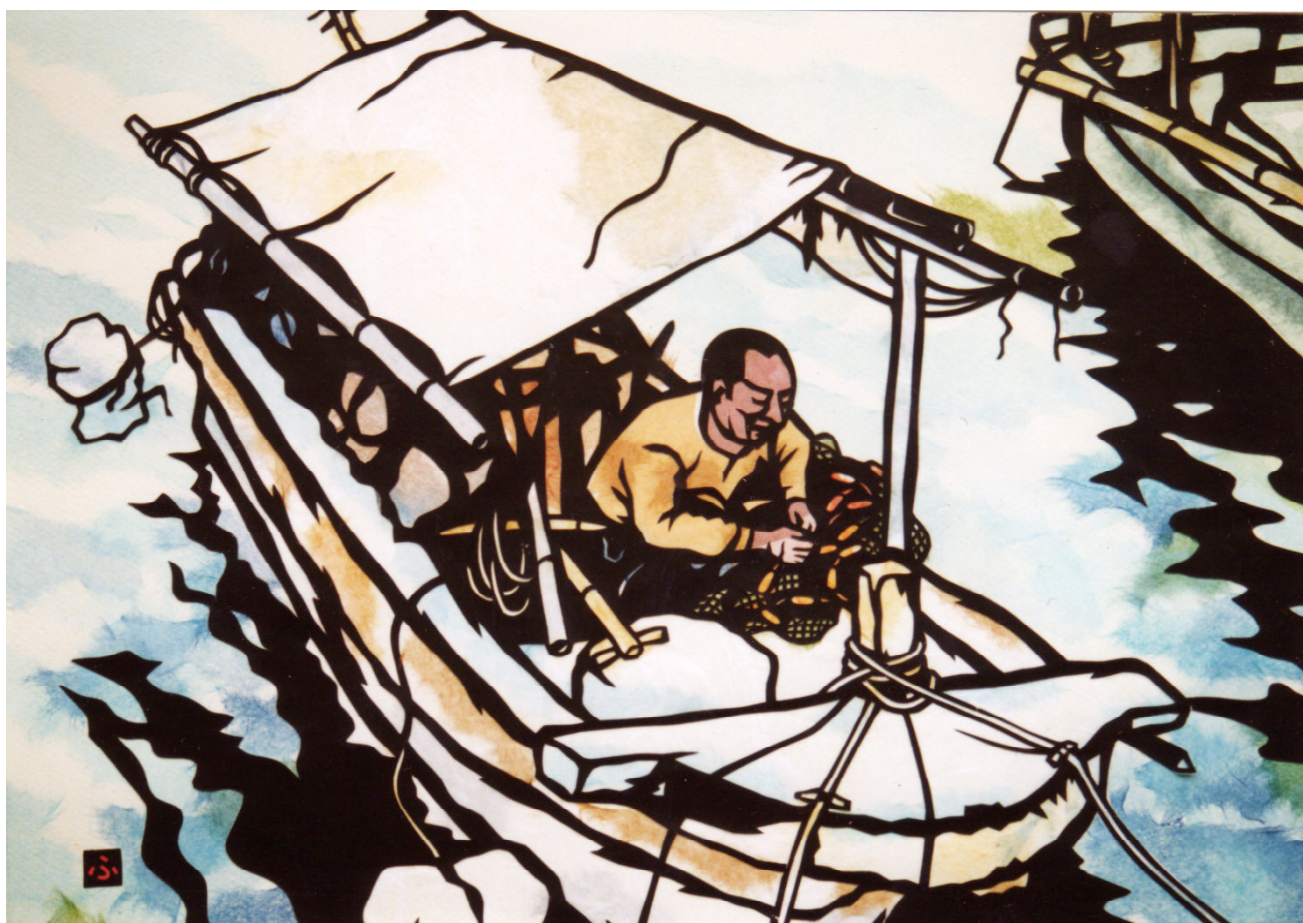


# かさおか

発行所  
天理教笠岡大教会

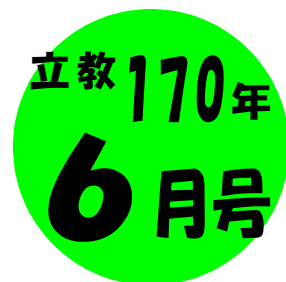
かさおか編集掛  
笠岡市用之江377  
郵便番号714-0066  
(0865)  
電話 66-1311  
FAX 66-1314



漁夫(瀬戸田)

## おつとめ奉仕者の増員

- ・一人ひとりが日々に真実を尽す
- ・布教によるおつとめ奉仕者の増加
- ・後継者講習会への参加による奉仕者の増加



# 四月祭典講話

島村廣義先生

昨年一月二十六日、教祖百二十年祭がつとめられました。当日世界各地から十七万人もの方々がお帰りになり、御存命で御守護くださる教祖に御礼を申しました。更にまた、昨年一年間は教祖百二十年祭の年として、三年間の私たちの祭活動の成果を結集して世界中の人々を一人でも多くおぢばにお連れ帰りしよう、そして、おぢばをいつも賑やかにして、教祖にお喜びいただくという親のお声にこたえて、実に三百万を超える人々がおぢばがえりをされ、一年を通して本当におぢばは賑わいを御守護いただきました。

それぞれに一生懸命つとめた真実は、それぞれに神様からそれに対する値はお与えただいであることと思いますが、しかし『みちねとも』には一年間を振り返っての内統領先生のお気持ち掲載されておりましたが、おぢばがえりということが、昔と比べて本当に容易にできるようになったので、うっかりすると真実の心が薄れてしまうようなことがあります。ただおぢばがえりをするのではなく、おぢばというところは、誠真実をつくすところ、あるいは真実を運ぶところ、ま

た、伏せ込みをする場所で、その伏せ込み・誠真実の運びの上に、また、神様から理を頂戴する。そうした場所がおぢばだと。世界から、おぢば・親のそばと慕って帰る子供に隔てなくお待ちかねになっているのが親のお心。この親を慕って帰る子供の真実が常に隔てなく子供の上を思うてその帰りをお待ちくださる親のお心に通って、ここにもめずらしいすけをお見せくだされ、自由の御守護をお待ちくださるから、この元のぢばへ真実の心を運ぶのが肝心と、別席でお取り次ぎいただく、と。

なるほど三百万おぢばがえりしたが、振り返ってみて、親神様・教祖にお喜びいただける誠真実をどれだけ運んだかという反省です。二十六日など振り返ってみると、なるほど交通の便がよくなったから大勢の方々が帰ってはいるが、帰るのも早い。到着してその日の内には帰ってしまうという姿が私どものお預かりする詰所でもよく見受けられますが、親神様・教祖のお膝元で、本当に心をゆっくりと落ち着けて親子団欒のひとつときを過ぎ、またおぢばにしっかりと、親神様・教祖に誠真実を受け取っていただき、そうした私たちのおぢばがえり、先に立つ者がそれを教え導き、かからないと大変なことになると反省をしてくださいました。

一年間の年祭の年を過ごしたお互いの姿を、今

一度振り返るとともに、いよいよ年祭後の歩み出しということですが、しっかりとおぢば帰りした人々を丹精したいこのようにも思います。

教祖の年祭を機におぢば帰りをされた人、また、三年千日の活動を通して導いた方々の中には、初めておぢばの土を踏んだ人、多くおられると思います。また、久しぶりの人、あるいは度重ねて帰った人と、色々でしょうが、おぢば帰りされた方々には、それぞれ親神様・教祖からをやの理をいただいて国元に帰られたに違いありません。このせつかくいただいた理がそのままに終わらないように先々花が咲き、実のなる姿をお見せいただけるように丹精しなければなりません。これが私たちのこれからの御用でもあります。

真柱様は、「教祖の年祭はゴールではない。世界一列陽気ぐらしという大きな目標に向かう長い道のりの一里塚に過ぎない。存命の教祖にお喜びいただくこうと、年祭という日限を仕切って、期間を仕切って全力で取りかかって来た。総力を挙げて成人を目指して来た、言わば非常時の動きを、これに続く常時、普段の日常の持続的な活動の充実につなげていかなければならない」とご教示くださっています。

真柱様には年祭後の歩み出しを早くしたい、早く取り掛かりたいということで、両統領の任期を半年早め、地方にあっては教区長も任期を早めて、

新たに任命くださり、おぢばも土地処も新しい体制で早く年祭後の歩み出し、次の塚へ向かって歩み出したいということで、その体制が今日整うてその歩み出しを始めたところです。

ところで、これからのを、やのお心に添うての活動の主題は、教会もそこに繋がるよふぼくも、教祖のひながたを真っ正直に辿るということ、真剣にたすけ一条の心で通るといことが、その活動の根本です。それには、今一度、それぞれの信仰の原点・元一日に立ち返って、我が心に信仰の何たるか、また、おたすけいただいた元一日をしっかり思い起こして、それにお応えする報恩の心を掻き立て、ご恩報じの道に邁進することこそ、常時活動に取り組む私たちの態度でなければならぬと思います。

お道にお引き寄せいただいた元一日、初代の道はみんな無い命をたすけていただいたとか、ならん事情の処を治めていただいたという一日があります。

なに、とてもやまいいたみハさらになし  
 神のせきこみてびきなるそや 一七号  
 せかいぢうとこがあしきやいたみしよ  
 神のみちをせてびきしらすに 一七号

即ち、いかなる病気も、不時災難も、事情のもつれも、皆、銘々の反省を促される篤い親心のあらわれであり、真の陽気ぐらしへ導かれる

慈愛のてびきに外ならぬ。

と、教典にお教えいたしておりますが、私たちは身上や事情に徴を見せられどうにもならない悩みの中から、たすけたいと、たすけていただきたい一心でこの道に入った、親神様にお縋りし、おたすけを願いました。そして、その時に初めて親神様は、人間の陽気ぐらしをするのを見て共に楽しみたいと思召されて私たち人間をお創りくださったこと、その元の日であることとにも、お造りくださっただけではなく、この世と身の内全てを御守護くださっている実の神様であると、更にこの

体は親神様からの借りものである、心一つが我がものであることなど、親神様の思召を諄々とお聞かせいただき、これまでの心得違いをお諭しいたさき、お導きをいただいて、親神様の思召に添い切る心を定めておたすけをいただきました。

このならん中をおたすけいただいた喜び、何物にも代えることのできない喜びの心が、お礼をせ



ずにはおれないその気持ちとなって、どうでも教祖にお喜びいただきたい、教祖にお喜びいただけることならと、ご恩報じの道として、たすけ一条の道を歩むようになりました。これが私たちの初代の道です。

教祖は金や物でないで、たすけて貰い嬉しいと思うなら、その喜びでたすけてほしいと願う人をたすけに行くことが、一番のご恩返しやからしっかりおたすけをするように。と、仰せられ、また、「命のないところをたすけてもらって結構やったなあ。自分がたすかって結構やったら、人さんたすけさせて貰いや」とも仰せられて、おたすけいたしたいことのご恩返し・ご恩報

じは、人をたすけることとお教えく下さり、更に、どうしたら人さんがたすかりますかとの尋ねに、

「あなたのたすかったことを人さんに真剣に話しさせていただくのや」と仰せられて、分りやすく人だすけの方法までお教えく下さり、しっかり人だすけに励むようお促しくだされたいです。

真柱様は、立教百六十四年春季大祭で「今日私

どもの信仰するものの多くは代を重ねている。自分自身が身上や事情をたすけられて信仰について人であっても、年限が経つに連れ、その時の感激はどうしても薄れてしまう。身上や事情をたすけられて、よかったというだけでなく、日々の御守護を喜び、感謝して通れるまでに成人する、丹精することが肝心だ」とお話しくださっています。

おさしづにも、「大恩忘れて小恩送るような事ではならんで(M34・2・4)」との、お言葉がありますが、身上や事情をたすけられてよかったということは、これは小恩だと、日々の御守護を喜び、感謝し、お礼を申して通れるまでに成人する、丹精することこそ、大恩を報ずる道であると、思案いたします。

教祖は人をたすけに行くことが、おたすけくださった親神様への一番のご恩返し、大恩を報ずる道であることをお教えくださり、更に、人をたすけることによって、我が身も結構にお連れ通りいただくことができることをお教えくださいました。更に、「さあさあ、人間の魂神が用におおしと思召すものは、どうしても引き寄せるから結構と思うて、これからどんな道もあるから楽しんで通るよう。用に使わねばならんという道具は、痛めてでも引き寄せる」と仰せられ、親神様が魂をお見定めになり、身上や事情に徴を付けて、手引きをしてお引き出しくださったのは、お急ぎ込

みくださる陽気ぐらしへのたすけ一条の道具として私たちをおおうと思召されたからであることもお教えくださっています。

今日の私たちは、自分自身が、あるいは親が、先祖がと、人によってはその違いはありましようとも、おたすけをいただいた、御守護いただいたという元一日があり、お導きいただくまにまに、別席順序を運び、九度聞かせていただいたお話し理によって、心を洗い、うまれかわって、たすけ一条の道を歩むことを心に定めて、お誓い申しておさづけの理を頂戴しました。よふぼくととなりました。

たんくくとよふぼくにてハこのよふを

はしめたをやがみな入こむで 十五号 60

このよふをはしめたをやか入こめば

どんな事をばするやしれんで 十五号 61

おさづけを頂戴したときの心、定めたたすけ一条の心を、生涯の心として守って通ること、その心に親神様がお入り込みくださり、たすけ一条の守護をしてくださることをお教えいただいています。

私たちお互いは今、おさづけを頂戴したときの心を違わぬように持っているだろうか、元一日、おたすけいただいた時の喜びや、ご恩報じの心が今も変わることなく受け継いで、自分の心にあるだろうか、また、代を重ねての信仰の者ならば、

初代の道に立ち返って今日の自分を振り返り、初代の報恩の心を我が心として受け継ぎ通っているだろうか。

教祖百二十年祭をつとめ終えて、次の塚を目指しての心新たな歩み出しの上に活動方針を定めてそれぞれが歩み出した今日ですが、お互いに道を信ずる者として、それぞれが今一度原点に立ち返り、よふぼくとしての使命を改めて自覚するとともに、おたすけいただいた元一日の日に立ち返ってご恩報じの道を一步一步力強く勇み心で歩み出したい、これが今日お教えいただく私たちの常時活動に取り組む姿勢でなければならんと思えます。

おさしづに

さあく事情尋ねるから知らそ。さあくたすけ一条、急がしいく。中に一つ片付けば又一つ、さあくたすけ一条急がしいく。これも救ける元や、台や、理や。さあくたすけ一条は天然自然の道、天然自然の道には我が内我が身の事を言うのやないで。天然自然の道は、長らえて長く通る事が、天然自然と言う。天然自然の道通るには、難儀な道を通るので、先の楽しみと言う。今十分の道通るのは先の纏れと成るのやで。さあく天然自然の理、この理を皆に聞かして樂します。さあく先々長らえて天然自然の理

を待つ。(M21・8・17)  
 というお言葉です。

この天然自然ということについては、人間の力、人の手が加わってない、自然のままの状態が、天然ということでしょうから、たすけ一条の道はいいかえればお道を通る者の当然実行すべき道であることとお諭しいただいているようにも思います。

今のお言葉で色々

ポイントがあると思  
 いますが、二つほど  
 絞って考えると、そ  
 の一つは、天然自然  
 の道を通る者の心構  
 えとして、「我が内我  
 が身の事を言うのやな  
 い」というお言葉です。  
 人をたすけて我が身たすか  
 るということ併せ考えると、  
 理解できるようにも思います。多く  
 の人は、自分がたすかりたいから人をたすけ  
 るというところから人だすけに踏み出す方も多い  
 ですが、たすけてほしいからたすけるといふより、  
 教祖のおひながた、この教えを素直に実行してお



たすけをした結果、自分がたすかるといふ、その徳を大切にすることだと思えます。親心にお応えする最善の行ないは、人だすけ、即ちにをいがけ、おたすけにあるということ、先ず一点、お諭しいただいていると思案します。

次に、「長らえて長く通る事が、天

然自然と言う」と諭されています。

すが、「難儀な道を通るので、先の楽しみ」、また、「今の分の道通るのは先の纏れと成る」とお諭しいただいていますが、

難儀さそう不自由さ  
 そうという理は、親々の心には無いけれど、難儀するは可愛一条から。

可愛という理から身上に  
 悩み掛ける。(M28・8・28)

かわいいから、はやく成人  
 してほしいという親心から、その姿の者にふさわしい旬、時とその姿をもつて色々とお仕込みくだされる。それ

れを受ける者の心一つによって、難儀やなあといふことにもなれば、また、難儀が喜びにかわることもあります。難儀やなあ、嬉しいなあと思うことは、成ってきた物事にあるのではなく、これを

受ける私たちの心にあるんだということをお諭しいただいているようにも思います。

すぐ諦めるのではなく、根気よく長く通ること、その中に色々な味わいを通してより大きな親神様のお心というものを悟り、心に治めることができるようになります。「理を味わい、身に行うてこそ、心に治まり身につく」と、別席でもお諭しいただいておりますが、要は実行すること、行なううちに教えのままに身に行うて通るその中に、だんだんとわかることができる、心に治めることができると思います。

たすけ一条ということについての、皆勇んでしっかり前向きに通っていただきたいということ、を神様からお諭しいただいたお言葉、私は今の申しあげた二点に絞ってこのお歌をそのように心に治めています。

これから、それぞれがそれぞれの持ち場立場でいかに教祖にお喜びいただくか、親神様の御守護にお応えしようかと心を定めて、仕切った歩みというよりも、常時の活動として普段の活動としてそれぞれに信仰の原点に立ち返ってご恩報じの道を心定めて勇んで歩み出しをしていただきたい、また、お互いに歩み出しをしようここにお願い申しあげて今日の私の話を終わります。

《以上要約》



# 第三回 大教会長杯 親善大ソフトボール大会

考えれば

余りある『守護の世界』

去る四月二十二日(日)、第三回大教会長杯親善大ソフトボール大会を開催させて頂いた。今回で三回目の開催を迎え、大教会長様を始め、皆様方のお力添えを頂き、また、この大会は参加される皆様のご協力を得て初めて成り立つことができる行事で、これまで続けさせて頂きましたことを心より御礼申し上げます。

この大会を開催させて頂く度に、改めて思いますことは、まずは何をさせて頂くにも、親神様、教祖のおはたらきを頂いてのことだと、思い起こさせて頂ける大会であるなあとつくづく感じます。思い返せば、第一回大会は開催前から霧雨が降っていて、問い合わせの電話が次々と掛かってくる中、グラウンド状態を見て回る者の姿や、整備をする者の姿、天気予報を何回も確認する者の姿があり、決断しかねた結果、参加される方の熱意で、一応集まるだけ集まる事にして、大教会に集合した事を思い出します。結果、開会式までは霧雨の中で行いましたが次第に晴れ渡り、無事最後まで晴天の中で行うことができました。



初回大会でもあり、一同手探り状態で、何とか無事に終わればと、全ては親神様にお連れ通り頂けた事を思い出します。五ブロック、十チームのエントリーで、参加者は百五十名余りであったと記憶しています。

第二回大会は、前日の天気予報では八十%の降水確率、ついこの前もこの確率で大雨が降ったばかりの予報で、準備段階から大方の気持ちで代弁すると・・・  
「雨が降るに決まっているのに準備するのかよ！」、「マジ！(真剣に)」。  
誰もが抱く「何故！」。であったのにも関わらず、一銘一人、或いは、たった一人でも誠真実の心さえあれば、『おかさぎ』の解釈の一文ではございませんが、「直ぐと受け取る、直ぐと返す」親神様の自由を垣間見させて頂いたような、真に鮮やかなおはたらきであった事を思い出す・・・  
待っていたと言わんばかり、閉会式を終え、テントとを片付けた途端、降り出した豪雨であった。「マジ！(本当です)」。



そして今回、前日の天気予報では降水確率六十%。前回の教訓で、大方の気持ちを代弁すると・・・  
「六十%…、前回より二十%も少ない。」「行ける行ける。」  
と、親神様のご守護に、もたれ切った姿!?!か、馴れからか?準備にも余裕がでてきた。前回の事で誰しも

安易に考えていた感は否めないが、曇り空の中、開会式が終わり、試合が始まると小雨が降って来た。試合が進むにつれ、雨脚が強くなり、どしゃぶりに…。それでも、参加したチーム全体で一試合は行うことができた。或る意味、強引ではあったが。それぞれのチームが一試合を済ませた後、代表の方を集まってもらい、協議の結果、雨の中「続ける」、「止める」の意見が丁度半々で、最後の決断は、大教会長様に委ねることになり、「止めましょう」とのご決断であった。風邪や怪我などのご考慮の上での親心であります。皆の心がその声を聞いて、すーっと得心できたように、続きは一チーム九人の代表で、ジャンケンによる勝ち抜き戦を行いました。

結果、見事優勝したチームは、高屋チームで、初k優勝に輝きました。

今回七ブロック(うち、一ブロックは前回参加されたが年祭の為断念)、十チームのエントリーがあり、百七十名余りの参加者があり、ほぼ名実共に親睦を深める大会となりました。

また、大雨の中、皆を楽しませようと毎回恒例となつていますが心のこもったうどんのはからいや、最後まで共々に撒取ひのきしんに汗を流させて頂けましたことを深く御礼申し上げます。ありがとうございます。

事後談になりますが、あの時、皆が親の声を素直に聞かせて頂いた事で、より一層激しさが強まった豪雨の中で、ゲームそのものを行うことも不可能な事であったし、その後、風邪を引いたという声も耳に届いていない。親の一声、受ける心に理がおはたらき下さいます事を、感じ取らせて頂いた大会でした。

高々天候の事で、たまたまと思いがちですが、現れてた姿はマジ(事実)です!

(大会実行委員会 中村 義太郎)

## ◆青年会 伏せ込みひのきしん団参

\*おぢばへ真実を伏せ込ませて頂きたい、との思いから、企画させて頂いています。あなたもぜひ、おぢばへ帰り、真実の汗を共に流しましょう

【日時】 7月1日 午前8時

【集合】 笠岡詰所、玄関前

【内容】 こどもおぢばがえり準備 (パレードフロート製作)

◆各行事に参加ご希望の方は、

各ブロックの担当者にお申し込みください

# 談話室



## ひむがしの野に……

地球誕生の太古より、くり返されてきた自然現象に「かぎろひ」と言う現象があります。気象条件さえ揃えば今でも観ることが出来ます。

「ひむがしの野にかぎろひの立つみえて、かへりみすれば月かたぶきぬ」

万葉の歌人柿本人麿が、持統天皇の皇子軽皇子(後の文武天皇)が、亡き父皇壁皇子をご追慕のため、大和の阿騎野(奈良県大宇陀町付近)に狩猟されたとき、柿本人麿が黎明の宇陀高原を詠んだとされます。

時に持統六年(六九二)十一月十七日の早朝であつたといわれています。

大宇陀町中央公民館に一枚の壁画があります。縦二、二メートル、横四、五メートルの大きな絵で、「阿騎野の朝」とあります。中山正美画伯の筆によるこの壁画の作成には、画伯は緻密な史実を考証しています。

それによると、  
一、阿騎野の宿营地は大宇陀町阿紀神社付近と推

考する。

二、人麿が作歌の実感を得たる地点は、阿紀神社前面の小丘上。

三、背景は秋山城跡南麓より、高見山に致る宇陀高原。

四、阿騎野の狩猟は、持統六年(六九二)である。

五、壁画の時日は、持統六年陰暦十一月十七日午前六時前後。

六、風俗考証、馬の大きさ骨格等の考証は、関保之助博士の指導援助による。

以上のような考証のもとに、成作されたといわれます。

では「かぎろひ」とは一体どんな現象なのか、ここに気象博士倉嶋厚氏の短文があります。

「かぎろひは、東の空が美しく染まる(朝焼け)だったと考えられています。(中略)山々は雲海に浮かぶ島のように見え、その上に美しい朝焼けの空が広がり、刻々と色合いを変えていきます。その時、気温を測ってみました。私たちの立っていた山腹はプラス一度、ところが七十メートルほど下に行くと氷点下四度、冷えて重くなった空気は下に流れて盆地にたまり、大宇陀町は(寒気湖)の底になり、私たちはその(湖畔)の山腹温暖帯に立っていたのです。昔の暦では十一月に必ず冬至が含まれていました。とすれば、旧暦十一月の

ぎろひは、一陽来復の(新しい太陽)が染めたもの、柿本人麿その光に(時代の夜明け)を感じていたに違いありません」

と記しています。

更に大宇陀町の観光協会の見解によると、

「かぎろひには諸説ありますが、観光協会では(厳冬の良く晴れた早朝、太陽が水平線上に現れる約一時間前に、太陽光線のスペクトルにより現れる最初の陽光)という説をとっています」

又、前述の中山画伯の冊子「壁画阿騎野の朝」には、次のように記されています。

「東の野に立つかぎろひは、西にかたむく月に対照した言葉で、明け方の太陽の光、それもかぎろひの立つという語感から、東の空に現れる最初の陽光であろうと考え、人麿の実感の歌であれば当然その情景は再現されるし、科学的にも解明できると信じて、昭和十四年十二月現地で観察しました。

それは霜の降る寒夜で雑木林での野宿でした。(中略)晴れた日の朝、太陽が水平線上に現れる時刻より約一時間前に、東の空に太陽光線スペクトルが現れる。これが早朝、肉眼に映る最初の光明であつて、しかも、かぎろひの立つという言葉に、最もふさわしい美しさを以って現れるのである。

さらに、かぎろひの立つ時刻に月のかたむく場



合はいつか、短歌の当時、歌の情景があったのはいつか、などを東京天文台、辻光之助技師、寺田勢造編暦技手に調査を依頼しました。

その結果、持統六年(六九二)陰暦十一月十七日、午前五時五十分頃で、そのときであれば盆地である現地の地形から見て、山の端に月が残っているのが判りました。」と記しています。

又、澤瀉人考博士も二年にわたって大宇陀町へ通い、やっとかぎろひを見ることができ、「これで自信を持って講義ができます」と大層喜ばれたそうです。

凍てつくような早朝、遠く高見山を中心に連なる山の稜線に突如、赤い糸のような光が光ったと

みる間に、糸はやがてきらめくような燃えるような、赤とも黄とも例えようもない光のテープになって、山並みを画きだす、それがかぎろひなのです。

人麿はあの光に後の文武帝、軽皇への期待をこめたのではないでしょうか。

大宇陀町では一九七四年頃から毎年、陰暦十一月十七日に「かぎろひを観る会」を開催しており、すでに三十四年になります。が、しかし、当日必

ずしも観えるというものではありません。気象条件が全て揃わねばならないからです。大気汚染の影響が大きく、年々観ることができなくなってきた、と関係者は嘆いています。

かぎろひを観る会の早朝、肌を射すような寒気の中、参加者は焚火を囲み笹酒、芋汁で暖をとりながら、人麿が詠んだ阿騎野の雄大なかぎろひの現象を、体験するのです。

たんくとなに事にもこのよふわ 神のからだやしんしてみよ 三号 40・135 誰か一緒に観に行きませんか。

# こころの詩

▼養徳社発行『陽気』誌六月号、「道柳」より転載

▽今回の課題は「練」、選六十一句中、笠岡に繋がる教友の方一名、一句が見事選ばれ掲載されましたので転載させて頂きます。おめでとうございます。

**天位** 東悠分教会長夫人 田林 美智子

練習に又練習の胡弓の音

▼表紙の切り絵 芦品分教会 佐々木ふさ子さん

(よふぼく)



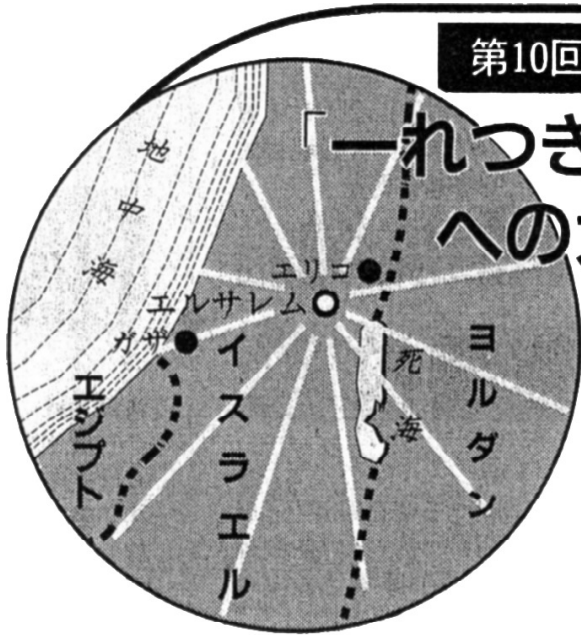


立教156年11月7日号

天理大学教授 上原豊明

第10回 中近東和解へ

「一れつきょうだい」への大きな前進



九月十三日月曜日(日本時間十四日)、ワシントンのホワイトハウス南芝生に設けられたステージで、クリントン米大統領の司会のもと、長年の仇敵イスラエルとPLOの間に和平への歴史的調印が行われた。この日は、アメリカ東部の秋らしい空。明るい太陽と澄み切った青空が、あたかもこの調印を祝福するようであった。

調印の後、イスラエルのラビン首相とPLOのアラファト議長が握手。この席に連なったカーター、ブッシュの前大統領、アメリカ政府や議会の関係者、駐米外交官、アラブおよびユダヤの指導者など三千人の出席者から拍手を受けた。

この後、ラビン首相が「あまりに多かりし血と涙……。いまわれわれは、お互いの『いのちの書』に、良き近隣者としての相互尊重と理解という『新しい章』を開きたい」と言えば、アラファト議長は「この同意は、今世紀中続いた苦悩と痛みの章に終わりを記すものである」と告げ、相互の歩み寄りを一段と深めた。

この調印は、パレスチナ問題をめぐってイスラエルとPLO、アラブとの間に繰り返されてきた、とどまるところを知らない争い、そこから派生した世界規模のテロ活動の抑止になるかもしれないとの希望も含まれている。まずは両国が互いの存在を認め合うことによって平和的共存が可能になったという点で、いままで何十年と続いた殺し

合いが避けられる道は開けたと言ってもよいであろう。

この調印によって、具体的にはパレスチナ暫定自治政府が樹立され、イスラエル軍はガザ、エリコから三カ月以内に撤退することになった。そして、十カ月以内に自治実施が可能となることになっていく。やがては、両国の平和共存も成立することを期待したい。

この調印までに費やされた、各国の紛争解決へのたゆみない努力。それは、陰の力として高く評価されるべきであろう。それ故にこそ、ステージの各国代表の顔にも一段と喜びの表情が感じられた。

しかし、クリントン米大統領は、「すべての平和には、和解への努力に対し、それを嫌っていままでの慣習に従おうとする敵がつきまとうものである」と述べている。事実、調印の前後には、調印に抵抗する争いから、既に多数の犠牲者が出ている。コジレフ・ロシア外相の「いまは大きな喜びの時であるが、幸福感に酔いしれている時ではない。不幸にもこれは第一段階にしか過ぎない」との言葉もクリントン大統領の言葉に似ている。勇気ある決断をなした両国および両国指導者のこれからの努力に大きな期待がもたれる。

調印後、中近東各国との交渉は、既にラビン首相、アラファト議長それぞれによって進められて

## 五月月次祭祭文

これの笠岡大教会の神床にお鎮まり下さいます

親神天理王命の御前に 会長上原理一 慎んで申し上げます

親神様には「このよふのしんぢつのをや月日なり なにかよろづのしゆこするぞや」と子供かわいい一条の親心のまに／＼一列子供の陽気ぐらしを楽しみに 身体をはじめ万いさいの守護を下さいます中は今は 花は美しさを競うかのように次々と咲き誇り 木々の緑も日々その濃さを増し 鳥達は子育てに忙しく飛び回る等 活気に満ち溢れた旬をお与え下さっております事は誠に有難く勿体ない極みでございます 私共は身体にも心にも親神様の御守護を感じさせて頂き喜びと感謝の心一杯でございますので 少しでも御恩報じをしたいものと 朝夕におつとめを通して御礼申し上げると共に 世界一列救けたいとの親心に添うべく よふぼくとの自覚の元 たすけ一条の御用の上につとめ励ませて頂いております

その中にも今日の吉日は五月の月次祭をつとめる日柄でございますので 只今からおつとめ奉仕者一同喜び心も一入に明るく陽気に勇んで坐りづとめてをどりをつとめさせて頂きます 御前には風の清々しさに誘われ心も軽やかに今日の日を楽しみに寄り集いました理に繋がる子供達が 救いの理作りにと相共に声高らかにお歌を唱和する真実の状を御覧下さいまして親神様にもお勇み下さいますようお願い申し上げます

さて世上では親が我が子を又子が実の親を殺害する事件が連日のように起きており その原因はそれぞれに違いますがその大元はやはり親への喜びと感謝の気持ち希薄になって御恩報じの大切さを見失ってしまっている事にあると思われます 教祖百三十年祭に向け新たな成人の歩みを始めた私共一人一人 改めて陽気ぐらし実現の為の用木との自覚を高め日々の喜び感謝の心を強めてたすけ一条の御恩報じの道を邁進させて頂く所存でございます

何卒親神様には世の風潮に流されず 只ひたすら親心に凭れ 親孝心一筋に成人の道を歩む皆の真実誠の心をお受け取り下さいまして 万たすけの上に尚も自由の御守護を賜り 親の有難さに気付かせて頂き共に御恩報じの道を歩む人が増してお望み下さる陽気ぐらしの世の中が一日も早く実現しますようお導きの程を 一同と共に慎んでお願い申し上げます

いる。この協定によって大きな影響を受けるアラブ諸国にとって、これはどんなものだろうか。いまこそ、ユダヤ人とアラブ人との共存が真剣に考えられるべき時が来ているのではないだろうか。さて本数では、世界は一れつきょうだいと聞かせていただいている。それだけに今度の動きは、世界平和への大きな前進であるものと心から歓迎する。

しかし、私たち自身の身の回りにも同じような問題があることに注意すべきであろう。民族問題には、さまざまな神話に根差す誤解や偏見がつきものである。根本的には、心の問題である。自己の心の中の歪みを相手に投影することなく、無心になって、自分も相手も同じ神の子であるという精神の下に拝み合う態度で接していく。そこに個人としての尊厳性に立った社会生活が可能となり、このような生活態度を国家、民族に広げてゆく時に、一れつきょうだいとしての世界家族の理想もいつかは樹立されるであろう。

国際化の中の「お道」ということに思いを致す時、日々のへにをいがけ、特に海外布教伝道において、全人類を神の子として見る人類観、すなわち人間の尊厳に徹して歩むことの大切さを思う。今回の調印の報道に接して、その思いをさらに深くした。



地域活動の参加を通して

上下分教会 山野 富美子

あなたの土地処の地域活動を、是非、ご紹介ください。 かさおか編集掛



土地処で...

「上下地域にぎわいづくりネットワーク会議」が発足して四年目になります。この会議は商工会を中心に、主に古い町並みが残る上下本通り商店街を中心にして町の活性化を目的とするものです。私は今まで多くの活動に取り組んできましたが、一番新しいものです。

上下は府中市との合併を経てどんどんさびれて商店街はすぐに「シッター通り」になるに違いない、と危機感を持った店主、商工会、それを支える住民等が毎月定例会を開催しています。参加者は全くの自主参加です。午後七時から九時までの予定がいつも大幅に越えてしまうのがちょっと大変!!この会議での提案「上下歳時記づくり」の一つが「上下ひなまつり」です。テレビ、新聞で知っている方もいらっしゃると思います。今年は二月十七日から四月一日までの四

昭和初期まで上下の商店街の風物詩だった  
でこ市にぎわい復活



露店ずらつと昔の風情

府中市上下町。明治から昭和初期、ひな祭り  
の時期に開かれていた「でこ市」が三日、地元  
の商店主の手で復活した。白壁の町並みの商  
店街に刺し子や野菜などの露店が連なり、観光  
客でにぎわった。

では、おひなさまの約六十店が並んだ。  
天神様をかたどった土人、観光客らは、江戸から大  
形。かつて同町では年に一度、人形や産品を売る  
中が立ち、子どもたちの楽しみだったという。同  
町出身の文筆家岡田美知代(二八五・一九六八  
年)の小説「亀さ」にも描かれている。市を新た  
なまちおこしにつなげようと、商店主らでつくる  
実行委員会が復活を企画した。

この日は約七百店の露店、刺し子、野菜など

つた。福山市駅前町の  
会社員瀬良広子さん(50)  
は「町の機がしい雰囲  
気がたまらない。活気あ  
るでこ市を今後も継  
けてほしい」と話して  
いた。

「でこ市は、四月一日ま  
での「上下ひなまつり」  
の「上下ひなまつり」  
の「上下ひなまつり」  
の「上下ひなまつり」

人が本通りにいるのを見たのは初めてじゃ!」と目を丸くしました。とにかく地元の人達がびっくりにしたのです。計画した私達も実行委員会として右往左往してお互いに対応しました。

でも良く考えてみると長年の積み重ねの結果が出ただけなのかな、とも思います。

毎月の定例会には約三十人が本音で話し合いをし、意見をぶつけ合うので普通の会議ではありま  
せん。そのせいでこの会議は「おもしろい(?)」  
と言って福山大学の教授やその学生、県地域事務  
所の職員、又新聞記者等が自主的に参加していま

十日を超える長期間で、「ひなまつり」の展示をしまし  
た。特にイベントを三月三  
日、四日と組んで集客に力  
を入れました。結果は…大  
成功でした。実はこの「ひ  
なまつり」は第二回目だっ  
たので「去年程多勢来てく  
れんよなー。」と多くの人々  
が思っていました。ところ  
が、急きよ臨時駐車場とシ  
ヤトルバスの手配、交通案  
内等をして大さわぎとなっ  
たのです。長く商店街に住  
む人々が口々に「こんな多勢の

# 大教会だより

## Ⅱ 教会指令 Ⅱ

### ◎ 任命・移転・改称・恒例祭日変更願

輝伯分教会

＊前任 雑賀元生  
＊新任 塩田能往

す。その多勢の人達の三年間の熱い思いがきつと関わっていると違います。又七十軒以上の「ひな」の展示も六十を越えるワゴンセールの協力も大きな支えになりました。結果として商店が店として成り立ち、多勢の人々が沢山のおひな様と共に幸せ一杯の空気に包まれたのです。  
長年の多勢の人々の種まきによってほんの少しのご褒美をいただいた気分です。  
信仰者としてもこの活動には大いに相通ずるものがあると思うのは私一人でしょうか。

### ◎ 第七九一期修養科

自 立教170年3月1日  
至 立教170年5月27日

#### \* 教養掛

三ヶ月間 山野弘実

(上下分教会長)

一ヶ月目 枝廣隆文

(東福山分教会長)

二ヶ月目 室悦子

(錦備分教会長)

三ヶ月目 掛谷宣和

(坪生分教会長)

#### \* 移転元

鳥取県米子市諏訪五〇

七番地

#### \* 移転先

大阪府豊中市島江町二

丁目一九番三号

#### \* 旧名称・系統位置

島根・米府・輝伯

#### \* 新名称・系統位置

島根・米府・新輝豊

☆ 鎮座祭 立教170年6月22日

☆ 奉告祭 立教170年6月23日

立教170年5月26日承認

#### \* 修了者

福山 池田雅浩

照陽 中村元彦

福東 藤井保人

福東 枝原善充

恵陽 榎原智之

稲讚 國方泰志

出雲 鳥谷達男

米府 三代幸徳

福山 田中典子

金浦 樋上郁子

吸江 木村恵子

稲倉 北川雅子

眞府 住川泰子

國須 河田紀子

國須 河田奈子

國須 河田泰平

① 原田泰平

② 原田泰平

### ◎ 第七九四期修養科

自 立教170年6月1日  
至 立教170年8月27日

#### \* 教養掛

三ヶ月間 杉原博之

(明石市分教会長)

## ・原・稿・募・集・

### 内 容

①小随筆 ②教会・布教所の独自の活動の紹介 ③俳句・和歌・川柳 ④教会行事開催後の報告記事等々

### 字 数

1000字前後(800字~1200字) 題名・所属教会名・氏名を明記して下さい。俳句等は1句からでも結構です。

### 寄 稿 先

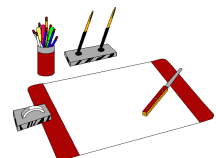
下記、大教会内『かさおか』編集掛宛ドシドシご寄稿下さい。

郵 便：〒714-0066 岡山県笠岡市用之江377

FAX：0865-66-1314

メール：[tenkasa@yahoo.co.jp](mailto:tenkasa@yahoo.co.jp)

尚、原稿はお返し致しませんので、予めご了承下さい。



一ヶ月目 時宗 一実  
 (吉舎分教会長)  
 二ヶ月目 福島 大介  
 (福満分教会長)  
 三ヶ月目 矢田 哲一  
 (八尋分教会長)

◎教会長資格検定講習会修了者

前期 立教170年5月14日終講  
 上下 押尾 清治

◎教祖御誕生祭

詰所受け入れひのきしん

自 立教170年4月17日  
 至 立教170年4月20日  
 福山 岡崎 豊彦  
 神邊 小坂 静宏  
 島根 面谷 美恵子  
 鶴山 中島 順子  
 鶴山 中島 洋子  
 稲倉 藤井 和子  
 瑞雲 豊田 俊美  
 宇津戸 豊田 カツ

◎本部食堂ひのきしん

自 立教170年5月1日

至 立教170年5月7日  
 高屋 重政 正男  
 自 立教170年5月8日  
 至 立教170年5月15日  
 陽實 下宮 真治

計報

赤木由枝姉

大教会おつとめ奉仕者  
 吸江分教会前会長  
 四月二十二日出直されました。  
 享年 九十一才



この季節になると、フツと思いで  
 される方があります。その方は私方

の教会の所属ではなかったのです  
 が、前会長当時、先方の会長様か  
 ら「体の具合も悪く、遠方の事で運  
 ぶ事が出来ないで今後一切よろし  
 くお願い致します」との事で、私方  
 の教会へ参拝下さる様になられた方  
 で、晩年は目も不自由になられ参拝  
 も難しく、十年来毎月、月次祭日の  
 夕方おさがりを持ってお伺いさせて  
 貰っていたのですが、七、八年前の  
 この時期、八十半ばを過ぎだんだん  
 と食が細り弱ってこられ、一、三日  
 おきに、おたすけに運ばせて頂いて  
 おったのですが、一人ぐらしだった  
 その方の親戚の方がきておられその  
 方々には全く信仰は無く、いつもほ  
 とんど無視され、見下されていると  
 言った状態でした。そうした中、偶  
 然、御本部の教祖のおさがりの白桃  
 を戴き、早速それを運ばせて頂きま  
 した。おさづけを取り次ぎ、帰りに  
 に付き添いの人に、事の由を話し、  
 “汁だけでもいいから口に運んであ  
 げて下さい”とお願いをして帰えり  
 ました。そして二日程して運ばして  
 もらいました。いつもの様に、”ご

めん下さい”と入るなり、付き添い  
 の人が“あっ、先生、先日はありが  
 とうございました”と丁寧に出迎え  
 て下さいました。狐につままれた様  
 な思いで中に入ると、“実は先日戴  
 いた白桃の汁を飲ませたら、牛乳を  
 飲まそうとしても受け付けずもどし  
 ていたのに、その汁を飲ますとゴク  
 ゴクと飲みました。それを境に牛乳  
 やおも湯を食べてくれる様になりま  
 した。本当に神様あるんですね”と  
 の事。だからいきなり“先生”に  
 なった訳です。その時、存命の教祖  
 のお働きだなぁ、と実感させられま  
 した。それから三ヶ月余、親戚の方々  
 の手厚い看守りを受け出直して行か  
 れました。天理教の葬儀でお送りさ  
 せて頂く事が出来、私方の教会の霊  
 舎に合祀させて頂く事が出来まし  
 た。最近つくづく思う事ですが、そ  
 うしたお一人お一人との深い縁の  
 中、皆霊様となられた後、尚、大き  
 なお力添えを下さりお守り下されて  
 ある事を思い、先人達に感謝しつゝ、  
 次の塚へ向い一歩一歩歩まなければ  
 と思う、今日この頃です。(と)